

ワークショップ

生死生
命の殖
倫と
理

◎日時

二〇〇九年三月二十四日(土) 一三時—一八時

◎会場

東京大学本郷キャンパス 法文一号館 二一五番教室

◎主催

東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」

生死の生殖と 生命倫理

日時 二〇〇九年三月一四(土) 一三時—一八時

会場 東京大学本郷キャンパス 法文一号館 二一五番教室

主催 東京大学グローバルCOE 「死生学の展開と組織化」

「生命」が現代的な議論の焦点となつて久しい。医療技術の進展や医療保健制度の拡充は、おおくの者に恩恵をもたらした。しかし、一方でそれらは、「生命」がある程度まで操作可能で、それゆゑ非常に傷つきやすいものであることを広く示す結果となつた。死生学の隆盛も、その傷つきやすい「生命」に対する、自意識の一形式として見ることができよう。

本ワークショップでは、死生学の数ある議題のなかでも、「生命」に対する倫理が先鋭化して現れる「生」と「死」という局面に着目する。そして、それぞれ「子づくりをめぐる文化と倫理」・「ドナー側から見た脳死・臓器移植問題」というセッションを設け、話題提供者と会場の参加者として、当該課題を多角的に検討することを目指す。

プログラム

開会の辞 13:00—13:10 島藺進 (東京大学大学院人文社会系研究科教授: 宗教学・宗教史学)

第一セッション

13:10—15:30 「子づくりをめぐる文化と倫理」

第一報告: 石川公彌子 (G-COE 特任研究員: 日本政治思想史)・・・『血縁』をめぐる歴史——柳田國男の思想から——

第二報告: 土屋敦 (G-COE 特任研究員: 社会学)・・・『産産期医療における「遺伝病問題」興隆の歴史——1960・70年代日本社会を中心に——

第三報告: 柳原良江 (G-COE 特任研究員: 社会学)・・・「代理母懐胎をめぐるメディア分析——身体と遺伝の意味づけ——」

コメンテーター: 赤川孝 (東京大学大学院人文社会系研究科准教授: 社会学)

司会: 山崎浩司 (上廣死生学講座特任講師: 社会学)

第一セッションでは、血縁・遺伝や代理懐胎をめぐる議論の検討を通じて、「いのちの始まり」の倫理について考える。第一報告(石川報告)では、柳田國男が憂慮した、大正から昭和期の核家族化と「血縁幻想」の高まりを概観する。第二報告(土屋報告)では、産産期医療における「遺伝病」問題興隆の歴史を、日本社会における乳幼児死亡率・産産期死亡率の低下局面の中に位置付ける。そして第三報告(柳原報告)では、代理懐胎に関する雑誌記事から、妊娠・出産や遺伝的繋がりに対する言説の変遷を追う。また赤川孝准教授からは、歴史社会学の観点から本報告群に対するコメントを頂く。

第二セッション

15:40—18:00 「ドナー側からみた脳死・臓器移植問題」

第一報告: 会田眞子 (G-COE 特任研究員: 医療社会学・医療倫理学)・・・「脳死の二重基準の臨床上的意味」

第二報告: 香西豊子 (G-COE 特任研究員: 医療史・医療社会学)・・・「ドネーションの史的背景」

第三報告: 児玉安司 (弁護士・東京大学大学院医学系研究科客員教授)・・・「患者/家族の領分、専門家の領分、国家機関の領分」

コメンテーター: 清水哲郎 (上廣死生学講座教授: 臨床死生学・倫理学)

司会: 土屋裕子 (G-COE 特任研究員: 法学)

第二セッションでは、脳死・臓器移植問題をドナー候補とその家族の側から捉え直し、「いのちの終わり」の倫理を考える。第一報告(会田報告)では、脳死ドナー候補に限定して脳死を死とすることの臨床上的意味を実証研究を通して考える。第二報告(香西報告)では、臓器等の提供をめぐる「意思」が、日本でいかに議論されてきたかを跡づけ、脳死の二重基準の史的背景を探る。第三報告(児玉報告)では、脳死の二重基準の法的論点や、現行法下における脳死での延命治療中止について議論する。また、清水哲郎教授からは、臨床死生学・倫理学の観点から本報告群に対するコメントを頂く。

総合司会: 佐藤健二 (東京大学大学院人文社会系研究科教授: 社会学)

各セッション: 報告は各20分、コメント10分、リプライ10分+討論60分

連絡先

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/index.html>

tel. & fax. 03-5841-3736 